

ある物理学研究室の挑戦 (第2報)

○串田 一樹¹(¹昭和薬大)

【はじめに】薬学教育は、6年制が始まる以前、いろいろな立場の薬学教育論が存在し、その中で薬学教育と薬剤師教育の2面性が対立軸にあり、薬学教育が世論としてまとまることはなかった。そのような状況の中で、今まで、薬学教育に対して多くの先人たちの挑戦があり、今回、ある物理学研究室(1974-1999年)の薬学教育に対する試みについて報告する。

【パイロット養成】パイロット養成の場合は、操縦桿を握って実際に飛行機を飛ばす訓練に重点を置いているが、当時の薬学教育では、化学の教育が中心であり、臨床教育がなくそのため患者が抜けていた。このような状況から、臨床の場に学生を送り出して、学生自ら医療現場の探索が始まった。

【薬害教育の推進】薬害教育は、昭和50年に経口血糖降下剤についてその危険性を指摘した医師と製薬企業を招いて講演会を開催したことから始まった。ここでは低血糖に対するリスクについて、何故、薬剤師が情報提供者として関わっていないのかと強く感じる瞬間であり、薬害には構造的な欠陥があることを学んだ。

【卒業研究の推進】研究テーマとしては、医薬品の臨床評価、医薬品データベースの開発、添付文書の日米比較、テオフィリンのTDM、在宅医療などに取り組んだ。この間、400人を超える卒業研究の指導を行った。この卒業研究の発表の場として、1987年に「第1回 医療薬学教育懇話会」を3大学によって開催した。

【考察】振り返ってみれば、社会に目を向けることから始まった研究室活動であった。明治から続いた薬を「つくる」学問から「つかう」学問へ変わろうとした時代にあって、社会との関係を明らかにしていく教育がある物理学研究室で実践され、それが社会薬学構築の第一歩となったことは間違いがないことであろう。